

# 小学生の漢字学習の個別最適化に向けて (2)

## — 一定着状況と宿題にかかる時間の関連 —

○高橋麻衣子 (東京大学)

平林ルミ (東京大学)

キーワード：漢字学習、宿題、インクルーシブ教育

### 問題と目的

小学校の国語科において、児童の漢字の書き取りスキルの習得は大きな目標の一つとなる。この目標を達成するために、漢字を反復して書く宿題を課す教員は少なくない。しかし、通常学級に在籍する学習障害等を持つ児童の中には、漢字の反復学習に多くの時間がかかる割に、漢字書き取りの定着の効果がさほど得られない者が存在する。一方で、漢字を宿題で規定された量の反復をせずとも定着が見られる学習者も存在する。そのような学習者には、他の児童と同様の宿題を出さず、その時間を違う課題の遂行に充てることでさらなる学習の進展をはかることができるだろう。

本研究では漢字の書き取り宿題の遂行状況を個別に検討することで、宿題の在り方を提案する基礎資料を得ることを目的とする。具体的に、漢字の反復学習が効果を持つ学習者とそうでない学習者の宿題にかかる時間を比較し、個別に最適化された宿題の在り方について検討を行う。

### 方 法

#### 調査参加者

群馬県内の公立小学校に在籍する小学 4 年生 1 学級 34 名とその担任教諭 1 名が調査に参加した。参加児童は平林・高橋 (2020, 日本教育心理学会第 62 回総会発表予定) と同一である。

#### 調査手続き

平林・高橋 (2020) の調査 1 と同一である。まず、漢字の反復書き取りの宿題 3 日分について、児童に宿題を全部行うのにかかる時間の予想と、実際に費やした時間を記録してもらった。さらに、担任教員に各児童が宿題に費やすと考えられる時間を個別に予想してもらった。宿題は、1, 2 日目はそれぞれ漢字単語 10 語をノート 1 行分 (4~12 回) 反復して書くものであり、3 日目は 2 日間に出された合計 20 語の漢字単語をノート 0.5 行分 (1~6 回) 反復して書くものであった。

この宿題の前後に 3 日目の宿題に出した漢字単語 20 語についての書き取りテストを行った。これらのテストは年度末に行われたものであり、すべて年度中に既習した漢字であった。

### 結果と考察

3 日間の宿題の前のテストの学級平均が 50 点

(標準偏差 25.6)、宿題後の平均が 83.7 点 (標準偏差 24.2) であり、宿題での反復学習は全体的には効果があったといえる。それぞれの宿題にかかった時間と各児童、担任教員の予想時間を Table 1 に示す。それぞれ中程度の相関が示されたが、教員の予想のほうが児童自身のものよりも精度が高い傾向にあった。さらに、宿題によってテスト得点が 35 点以上向上した 18 名の学習者を「反復効果あり群」、35 点以上向上しなかったが事前テストの成績が 75 点以上の 10 名の学習者を「反復効果なし：成績高群」、それ以外の 6 名のものを「反復効果なし：成績低群」として、それぞれの宿題にかかった時間を比較した (Figure 1)。その結果、反復学習に効果がある学習者の宿題時間が最も短く、そもそもの漢字の定着度が低く反復学習も効果が見られない学習者の宿題時間が最も長いこと、さらに定着度の低い学習者に対しての教員の予想時間が短かったことが示された。

Table 1 宿題にかかった時間と予想時間

|           | 1 日目             | 2 日目             | 3 日目             |
|-----------|------------------|------------------|------------------|
| 実際の時間 (分) | 11.97<br>(5.88)  | 9.56<br>(5.30)   | 9.16<br>(3.78)   |
| 児童の予想 (分) | 19.37<br>(14.12) | 16.73<br>(15.68) | 14.96<br>(13.01) |
| 実時間との相関   | .59              | .52              | .03              |
| 教員の予想 (分) | 14.56<br>(3.56)  | 10.00<br>(1.94)  | 9.65<br>(1.77)   |
| 実時間との相関   | .47              | .47              | .37              |

注) 括弧内は標準偏差

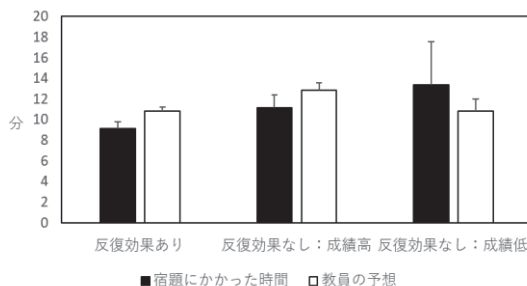


Figure 1 成績別の宿題にかかった時間